文化

潮流 in kyoto

日文研の共同研究「関西モダニズム再考」が発刊

伝統に根ざして近代化

独自に育てた文化問う

関西のモダニズム（近代主義）について、学際的に迫った研究書「関西モダニズム再考」が発刊された。十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、大阪や京都、神戸に開花した都市文化を多面的に取り上げた。戦後一貫して東京中心主義が強まってきたが、関西独自にはぐくまれた近代の文化を問い直している。

（文化報道部　二松啓紀）

関西のモダニズムについて語る竹村教授（右）と鈴木教授

本書は、国際日本文化研究センター（京都市西京区）の共同研究「日本のモダニズム―関西を中心にした学際的研究」（二〇〇〇―〇二年度）の成果をまとめたもので、竹村民郎・元大阪産業大教授と鈴木貞美・同センター教授が編者を務め、十四の論文を収めた。

二十世紀初頭の日本では、「東京都市文化圏」と「大阪・京都・神戸都市文化圏」という、まったく異質の文化圏が共存した。関西は明治以降、経済、社会、文化において東京よりも先進性があり、地域に根ざした近代化を遂げていたという。

先進性どうみるか

竹村教授は「地方の重要性が認識される現代においても、なお東京一極集中が進んでいる。しかし、歴史を振り返ると、必ずしもそうではない。東京に対抗するものとして、関西があった。過去の先進性をどう見るのか、そして、どのように回復するかが一つのテーマではないか」と語る。

本書によれば、大阪市は関東大震災後の一九二五（大正十四）年に日本一の大都市となり、三三年まで全国一の工業生産額を誇った。二〇年代に

発刊された『関西モダニズム再考』（思文閣出版）

は、大阪は東京よりいち早くモダンなビルが建設され、洋装の女性が行き交う姿は銀座よりも心斎橋の方が多かった。

竹村教授は「モダニズムの形成において、物質面のみならず地域にも着目できる」と指摘する。兵庫県の住吉・御影地域に住む実業家や酒蔵の旦那衆らは「陰徳あれば陽報あり」の考え方に結びついた実業精神と地域への奉仕を信念としていた。「西洋の翻訳思想ではなく、上方商人の伝統的な学芸や文化尊重の系譜に連なる」と言う。

京でのモダンさ

京都では、一八九〇（明治二十三）年に完成した琵琶湖疏水が近代へ飛躍するための運輸・水源面のインフラ整備の先例になった。

この疏水が市街地の照明や市電を導入するきっかけとなり、新京極では、映画館や街灯が並ぶなど、全国有数のモダンなかいわいが現れた。梶井基次郎の小説「檸檬」は書店の丸善を舞台として登場し、三条、寺町、新京極など、「近代京都」を代表する空間を描いている。

鈴木教授は「明治期は上層部だけが西洋化したが、それが庶民にも及んだのが一九二〇年代。都市部を中心に、人々の生活が大きく組みかえられていった時期でもある。また、東京は物質、精神面で『江戸』を失いながら近代化を遂げたのに対して、関西は伝統を残しつつ、近代化を遂げた」と説明する。

東京中心を相対化

関西は大陸への足がかりにもなった。特に、神戸生まれで京都に在住した日本画家橋本関雪（一八八三―一九四五）の研究は興味深い。彼は東京への対抗意識を持つことなく、中国への渡航を六十数回繰り返し、中国美術にも影響を与えた。関西と大陸が直接結びついた一つの例だという。

一方で、明治以降の近代化は日本を戦争に向かわせてしまう。「敗戦後の日本は、アジア侵略の歴史を反省し、西洋近代化の道を出直した。いわば『明治維新』の大義をリセットしようとした」とする鈴木教授の指摘は重要だ。それだけに、モダニズムの全体像をとらえる意義は大きい。東京中心のモダニズムと比較し、相対化できる関西は一つのかぎになる。

思文閣出版刊、八九二円。

見聞録

フロイデ彦島の暮らしの空間

五十嵐太郎

山口県は下関市の端にある「フロイデ彦島」を訪れた。グループホーム、ケア付き老人ホーム、地域交流スペースなどを複合させた施設である。高齢者が共同生活を送る場は、いかに管理するかという機能的な側面ばかりが注目されるが、設計者の大野秀敏はそこに暮らしの質を高めるための空間を生みだした。本人によれば、赤い壁と白い布がデザインの鍵となる。

フロイデ彦島は傾斜地にたち、住宅街に面する入り口側は威圧感を与えないよう、大部分を道路のレベルから下に沈めている。また外観も個室のスケールに分解し、ベンチとテント地を組み合わせた装置をバルコニーに付加した。これが、海に向かう帆のようにも見える、白い布である。施設は関門海峡に面し、つねに行き交う船をのんびり眺めることができる。ここでは、ホテルだったら泊まりたいと思わせるような絶景が楽しめるのだ。

一方、赤い壁は室内において展開する。全体の構成としては、中庭と食堂が中心となり、そのまわりに各グループの共有空間を置く。さらにこれらを個室空間が囲む。つまり、入れ子状になっている。屋外と接する白い個室空間に対して、中庭やケアハウス・ユニットの共有空間は赤い壁をもつ。敷地の形状にあわせて、個室群がずれながら連続する複雑な輪郭のプランだが、色彩を導入することで、自分の位置を簡単に認識できる。

実際、フロイデ彦島の内部を歩くと、フロアや位置によって、中庭が共有部分とつながったり、切り離されることで、赤い空間が伸びたり縮んだりする感覚を体験できる。小さな都市のような場の関係性さえ生む。言葉を使わないサインとして、赤い壁は有効に機能している。

フロイデ彦島は、入居者が自分の描いた絵画を廊下に飾るなど、生命の喜びが感じられる場所になっている。赤い壁のもたらす雰囲気も無関係ではないだろう。シンプルなデザインがもてはやされるなかで、時流にのることなく、経験の豊かさを追求した建築である。

（建築評論家）

歌会

◇京都歌人協会例会　2月後1時、京都市中京区丸太町通七本松西入ル、京都アスニー。7百円。井上さんぁ075（841）8074。

文化メモ

▽観光客の行かない社寺をめぐる会例会　2日前8時半、京都市中京区寺町通御池上ル、同市役所前集合。「伊勢路の古仏めぐり」をテーマに、慈恩寺、蓮光寺、田宮寺などを巡る。7千円（拝観、バス、昼食、保険）。申し込みは達さんぁ075（231）4284。